

2021年1月17日 久宝教会 降誕節第4主日礼拝

メッセージ「私について来なさい。神様によって立ち上がらされて」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 4章18-25節

この一週間は、私にとっては、なかなか大変な一週間でした。というのも、月曜日から熱を出してしまいました。コロナが拡がって来た昨年からは、常にマスクをするようになり、手洗い、うがい、消毒、を一日に何度も繰り返すようになりました。これまで以上に健康管理、感染予防に気を付けて来た結果、風邪をひくこともなく過ごせて来ていましたが、ここに来て風邪をひいてしまったわけです。しかも、それがただの風邪なのか、それこそコロナなのかも分からない。まあコロナも大多数の人は、無症状であったり、軽症であったりすると聞いていたので、「大丈夫だろう」とタカをくくっていましたが、寝ていても熱がどんどん上がって40℃を越えたので、どうもおかしいな、今年は流行っていないと言われていたのにインフルエンザだろうか、それともコロナなんだろうか、と不安になりました。結果として、2日目に発熱外来を受診して、インフルエンザでもコロナでもないでしょうと言われて、3日目には熱が下がったので、一安心でした。

高熱を出して寝ている間、私の頭の中では、これが本当にコロナで、重症化したら、どうしようか。困ったことになるな。仕事のことはどうするか、家族のことはどうするか、などと考えていました。また後で聞いた話ですが、私の連れ合いは、私が寝ている間にコロナで死んでしまっているのではないかと、何度も確かめに来ていたそうです。幸いにも、私は今回そうではありませんでしたが、日に日に感染者数が増加し、重症者数も増え、死者数も増えているという報道を聞いていると、その一つ一つの数字の向こう側にも、一人一人の人の命があり、生活があるということ、改めて意識させられました。たとえ感染しても大多数の人が無症状であったり、軽症であったりする中、まさか自分や身内が重症化するとは思っていなかった人がほとんどでしょうし、また「何で自分が、こんな目に遭っているのか」「こんなはずじゃなかったのに」と思っている人がほとんどなのではないかと思えます。

今日は1月17日です。あの阪神淡路大震災から26年が経ちました。それぞれの場所で街並みは大きく変わり、そこに住んでいる人たちも変わったことと思えます。しかし、亡くなられた6434人の方々とそのご遺族にとっては、「何で亡くなってしまったのか」という思いは、いつまでも変わら

ないのではないのでしょうか。大震災にしても、感染症にしても、大きな被害を受けて亡くられる方がいる一方で、被害が小さく、軽症で生き残られた方もいる。その違いは一体何なのか……。私たちには分かりません。もしかすると、それは「日頃の行いの良し悪しだ」とか、「信心／信仰心の有無だ」と言う人がいるかもしれません。しかし、本当にそんなことがあるのでしょうか。全ての命を創られた神様は、ある一定の条件をクリアできた人だけを特別に祝福して、クリアできなかった人は見捨てられる、そんな方なのではないのでしょうか。聖書を読むと、そこに記されている神様の姿勢は、それとは全く異なっているということが分かります。

今回の聖書のお話は、イエス様が最初の弟子として、ガリラヤ湖で4人の漁師たちに声をかけられたというお話でした。ガリラヤ湖は、琵琶湖の4分の1くらいの大さきのようなのですが、その湖畔にはいくつもの漁村があり、人々はそこで魚を獲って暮らしていました。18節では「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられた」とありますが、この少し前の13節には「湖畔の町カファルナウムに来た」とありますので、カファルナウムでの話だと思われま。カファルナウムは当時、人口1,000人位の小さな漁村であったと考えられていますが、今でも「シモン・ペトロの住居跡」と伝えられている家の遺跡があるそうです。

そこでイエス様は、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打って漁をしているのを見かけて、二人に声をかけられました。漁をしていたわけですから、まだ明け方早い時間帯だったのでしょうか。また沖に漕ぎ出して舟から網を打っていたのだらうということを考えると、イエス様は彼らが漁をしている様子をしばらく眺めておられて、岸边に戻って来た所で声をかけられたのではないかと思います。彼らがどんな顔つきで岸边に戻って来たかを想像する時、彼らの顔は「大漁だ！大漁だ！」と喜びにあふれた顔をしていたのでしょうか。もしそうなら、イエス様は彼らに声をかけたのでしょうか。きっとあまり浮かぬ顔をしていたのではないかと想像します。

18節には「彼らは漁師だった」とあります。そんなことわざわざ書かなくても、湖で網を打っていたわけですから、見ただけで分かりそうですが、ここで「漁師」と書いてあるのは、それが当時の古代イスラエル社会では、宗教的にも穢れているとされていて、社会的にも差別されていた職業であったということを表わしています。ペトロとアンデレに声をかけた後、イエス様はさらにゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネにも声をかけられま

した。イエス様から声をかけられた彼らは 4 人とも、網も舟も、そして父親すらもその場に置いて、イエス様について行ったとあります。

網も舟も彼らの持ち物であったのかどうかは分かりません。船主から借りていた船や網だったかもしれませんが。また仮に船主であったとしても、漁師たちはガリラヤ湖での漁業権を「仲買人」とも呼ばれた徴税人たちからリースされていたようで、そのリース料が漁獲高の 4 割にも上っていた記録もあるそうです。その上で獲れた魚は仲買人に買い叩かれ、更にそこからローマ帝国への税金、ユダヤの領主への税金、エルサレム神殿への税金という「三重の税制度」で、搾り取られていたわけですから、漁師たちは陸の上の「小作農」たちと同様に、貧困と被差別にあえぐ人たちでした。

漁業を生業とする漁師たちにとって、魚が獲れなければ、その日のパンを手に入れることはできなかつたかもしれません。けれども、魚が獲れたとしても、それはそれでその日のパンと、漁業権のリース料、税金と借金を支払ったら、その他は自分たちの手元には何も残らずに、再び命懸けで漁へと出て行く日々だったのだらうと思われまふ。働けど働けど、暮らしは一向に良くなるない。むしろ網は日々に摩耗し破れていきます。たとえ繕い、手入れをしても、ほころびは日々に大きくなっていく……。彼らはそんな悲しい負の連鎖の中にいたのではないのでしょうか。

けれども、イエス様はそんな 4 人の漁師たちに、社会の中で弱く小さくされている人たちを敢えて選んで声をかけられました。「私について来なさい。魚ではなく、人間をとる漁師にしよう」。そして彼らはすぐに網を捨て、舟と父親を残して、イエス様に従いました。20 節と 22 節では「網を捨てて」「船と父を残して」という二つの言葉に訳されていますが、元々の言葉は同じで「そのままにしておく」という意味です。ですから網という商売道具を「捨て去った」「もう二度と手にしなかつた」ということに重点があるのではなく、むしろ「今一番大切なものにこそ目を向けて、その他のものには構わない」ということなのだと思います。

「イエス様に従う」「イエス様の弟子となる」とは、商売道具を捨て去り、生業も家族も捨てて、命懸けで従うことだ、ということではありません。

「今日の取れ高、自分の働きは十分だらうか」「どれだけ高く評価してもらえだらうか」「借金は後どれだけ働いたら返すことができるだらうか」などと考えて止まず、常に気が重く、不安が無くならなかつた、そんな貧しくされていた漁師たちに、イエス様はそのまま「私について来なさい」

「私のいるここへ来なさい」と言われました。事実、ペトロは家族を捨てて絶縁したわけではなく、イエス様と一緒に再びカファルナウムの「ペト

口の家」を訪ねていたことも、福音書の中にはきちんと記されています。

私たちは自分で自分の生活や命を何とかしようとする時、様々なことに心を奪われ、気を病み、心からの安心を得ることがないのではないのでしょうか。一生懸命、努力して積み上げて来ても、それは突然の事故や病気、震災などの災害で全て失われてしまうかもしれません。イエス様が「私について来なさい」と言われる時、それは「あなたは何に従っていますか」

「あなたが一番大切にしていることは何ですか」と問われているということです。イエス様に従った4人の漁師たちは、この時から悩まなくなり、迷わなくなったのでもありませんでした。この後も、イエス様と行動を共にしながらも、迷い、疑い、裏切ることさえありました。それでもその度にイエス様は彼らを赦し、彼らは神様へと立ち返って行きました。

神様を信じ、神様に従うとは、特別などこかへ行くことでも、特別な何かをすることでもなく、今ここで、ありのままの日々の中に、共にいて下さる神様に気づき、心を向けるということなのではないのでしょうか。神様が私たちを、災害や病気から「守ってくれるか、くれないか」ではなく、たとえ望まなかった災害や病気に遭ったとしても、それでも見捨てないで共にいて下さっているのが、イエス様に現わされている神様の姿なのではないかと思えます。

今日の招きの詞では命の神ヤハウエは、「人の子よ、自分の足で立ちなさい」と預言者に語り、そして預言者は「神の霊が自分の中に入り、私を自分の足で立たせた」(エゼキエル2:1-2)と記しています。大きな災害や病気などで、これまでの自分の計画や努力が破れ、生活が崩れたとしても、それでもなお「自分の足で立ち上がること」ができるように神様は、支え、備えて下さいます。それは具体的には、それぞれの人の周囲にいて、様々な手助けをしてくれる人たちや、背中を押してくれる人たち、痛み傷ついた心に寄り添い、支えて下さる人たちの手を介してなのでしょう。神様は人の手を介して働かれます。26年前の阪神淡路大震災の時も、もう何もかも失って、希望も失った、もう二度と立ち上がることができない、と思われていた所に、多くの方々の人の手が加わり、神様が共に働いて、今日へとつながって来ました。

「私について来なさい」と言われるイエス様は、「私が今も、ここにいることに気付いていますか」とも言われています。このコロナ禍の中で、先行きが見えず、目先のことに振り回されて一喜一憂している私たちですが、神様はそんな私たちと今日も共にいて下さいます。神様によって立ち上げられて、私たちは今日もここから歩みを進めて行きます。